

1 「稲荷神社」

越谷市内で一番多い神社は稲荷神社で、約36社ある。各地域に分布し一番多いのが旧出羽村（七左衛門など六ヶ村）の10社である。境内社や個人の屋敷に祀られている祠等を含めると、数はさらに増える。全国的にみても稲荷神社は一番多く約二万〜三万社あると言われている。本社は京都の伏見稲荷大社で古代にはこの地域に勢力を持った秦氏の氏神であった。祭神は記紀神話の宇迦之御魂神（須佐之男命の子）で社名の稲荷（稲生り）から分かるように稲など五穀を司る神様である。江戸期以降、新田開発が進んだ旧出羽村等で五穀豊穡を願い勧請されたものと思われる。

また、境内社に稲荷社を持つ神社も多くあり、越ヶ谷久伊豆神社の埼玉稲荷神社、四条日枝神社と中町浅間神社の笠間稲荷社などがある。明治末から大正にかけての神社祭祀策により、小さい稲荷社は無くなったが、当時農村だった越谷の稲荷信仰が偲ばれる。その後、稲荷神は商売繁盛の神とされ、現在も敷地内に稲荷社を祀る会社、工場、商店を見かける。

・七左衛門では昭和に入り上組の氏子が観照院の境内社であった稲荷神社（現七左町）を鎮守として祀るようになったため、本来の鎮守の稲荷神社（現新越谷）は下の稲荷様と呼ばれる。

・南荻島五社稲荷神社は社名のとおり五柱の祭神を祀り、文教大学の脇から長い参道が続いている。

・千足伊南理神社は社名が「稲荷」から「伊奈理」「伊奈利」と変わり、現在の「伊南理」になっている。

・御殿町稲荷神社は徳川将軍家の越谷御殿にゆかりの社である。

・四丁野疣稲荷神社はかつてあった御神木を摩ると疣が治る、と言われたことから「疣稲荷」と呼ばれる。

・東方稲荷神社は小社ながら12本の朱の稲荷鳥居が並んでいる。

・中島稲荷神社は稲荷神と諏訪神を祀り、社名標は中島稲荷神社・中島諏訪神社と併記されている。諏訪神社の本社は長野の諏訪大社で祭神は建御名方神、涉狛、農耕、武勇の神とされている。

2 「香取神社」

旧下総国一の宮の香取神宮を勧請した香取神社は越谷に17社あり、かつて、下総国に属していた地域である。祭神は経津主神で、旧常陸国一の宮の鹿島神宮（祭神・武甕槌神）と共に東国の守護神（軍神）として崇敬されてきた。香取、鹿島神宮のある地域は古代、中臣氏（後の藤原氏）の支配下であり、藤原氏の氏神であった奈良の春日大社に香取の経津主神、鹿島の武甕槌神が祭神として祀られている。経津主神は日本書紀に出てくる神で武甕槌神と共に出雲の大国主神から国譲りを承諾させたとある。

・大沢香取神社は慶長年間に奥州道（日光街道）が整備され、鷲後周辺（現東大沢）の人々が街道筋に移住、大沢町が形成された寛永のころ、鷲後の香取神社を移転したものである。鷲後の香取神社は室町時代の後期に勧請され、移転後も旧社は残り「元香取」と呼ばれる。大沢香取神社の彫刻は市の文化財に指定されている。

・下間久里香取神社で毎年7月に行われる「雨下無双角兵衛流獅子舞」は県の無形民俗文化財に指定されている。

・三野宮香取神社の境内には地元出身の三ノ宮卯之助銘の力石があり、市の文化財に指定されている。

・大道神社、大竹神社、川崎神社は明治40年地域の神社を併合し

社名を村名としたが、もとは香取神社であった。

川崎神社は県指定無形民俗文化財の「北川崎の虫追い」の行事があり、毎年7月24日の宵に豊作を祈願して行われる。

3 「久伊豆神社」

久伊豆神社は元荒川流域に分布し、中世の武士団、武蔵七党の私市（きさい）党・野与党の勢力圏にあり、大己貴命（大国主神）を祀る出雲系の神社である。岩槻にある久伊豆神社が欽明天皇の代（539〜571）に創建と古く、加須市騎西（元私市藩）の玉敷神社は文武天皇の代（703）に創建、元は久伊豆宮と称し久伊豆神社の総本社といわれている。

越谷には越ヶ谷、蒲生、荻島、大相模、袋山、川柳に12社あり、野与党であった越ヶ谷郷の古志賀谷氏、大相模郷の大相模氏、八条郷の渋江氏が創建に関わっていたと考えられる。

・越ヶ谷久伊豆神社はかつて、越ヶ谷など近隣七ヶ村の総鎮守（郷社）で、現在も越谷で一番大きな神社である。室町時代、この地を領した旧伊豆国宇佐見の領主宇佐見二郎が社殿を再建したといわれ、江戸時代初期には徳川将軍家の越谷御殿が近くにあり、徳川家康から五石の朱印地を寄進されている。

平成7年、伊勢神宮内宮から拝領した旧板垣南御門を第三鳥居とした。境内に県指定文化財の「平田篤胤
飯寓跡」「フジ」、市指定文化財の「懸仏」「平田篤胤奉納絵馬」「三ノ宮卯之助銘の力石」「越谷吾山句碑」
「社叢（神社の森）」がある。

・蒲生には久伊豆神社が4社あり、一は蒲生1丁目にある久伊豆神社で、村の鎮守であり、大正時代までは
本郷宮（ほこのみや）と呼ばれていた。二は蒲生西町にある久伊豆神社で西組の村民持ちで小鎮様と呼ば
れていた。三は茶屋通りの久伊豆神社で近くにある清蔵院持ちであったが、現在は個人持ちになってい
る。四は蒲生寿町の久伊豆宮寿神社で町内の世話人で護られている。

4 「天満宮（天神社）」

天満宮の祭神は菅原道真で天満自在天神と称し、略して天満・天神と呼ばれる。平安時代、右大臣であつた道真は左大臣藤原時平の讒言により大宰府に左遷され、配所で没した。その後、都では時平の病死、落雷などの天変地異が続き、道真の崇りだといわれ、霊を鎮めるため（御霊信仰）に北野天満宮が祀られた。当初は北野の地主神、火雷神と結び付けて祈雨・避雷・農耕の神とされ、鎌倉時代には慈悲・正直の神、室町時代には和歌・連歌の神、江戸時代になって学問の神とされた。現在は受験の神様として関東では湯島、亀戸天神が有名である。平安末期以降、天神信仰は全国に広がり、神社数では稲荷社、八幡社に次いで三番目に多い。

越谷には現在、10社ほどの天満宮・天神社がある。かつては各地域にあったが、無格社だったため明治末から大正にかけての神社合祀策で村社に併合された。また、稲荷神とともに屋敷神としても多く祀られ、現在も屋敷地内に見られる。

・増林天神社はもともと村民持ちの神社で大正2年、護郷神社に合祀されたが本殿等は地元の人々が護ってきた。昭和60年、社殿の新築を機に合祀を解除された。

・蒲生天神社がかつて東組（現蒲生本町）46戸の氏神で195坪の社地があったというが、大正4年、村社久伊豆神社に合祀され社殿は取り壊された。現在は東組の集会所の後方に鳥居と本殿が再建されている。

・大間野三社大神社は明治4年、稲荷・久伊豆・厳島神社の三社が合併し、天神社の社地に移転したが、天神社は合併されずに境内社として残っている。

・四条日枝神社は明治41年、稲荷社・天神社・水神社・弁天社を合祀したが、その際、天神社の社地に移転したため「天満天神社」とも呼ばれている。

5 「八幡神社」

八幡神社（八幡宮）は全国では稲荷神社に次いで多いが、越谷では5社と少ない。総本社は大分県にある宇佐神宮で、平安京の鎮守として京都府南部の男山に石清水八幡宮として勧請されるなど、古来より皇室の崇敬を受けてきた。古代、宇佐は航海の中継地で海神の八幡神が祀られていたが、平安時代に八幡神は応神天皇であるとされるようになった。このため祭神は応神天皇・海神の比売大神・応神天皇の母の神功皇后の三柱になっている。康平6年（1063）源頼義が鎌倉の由比ヶ浜に石清水八幡宮を勧請し、源氏の氏神とした。その後、治承4年（1180）鎌倉入りした源頼朝が現社地に移し鶴岡八幡宮とした。建久3年（1192）鎌倉幕府が開かれると武家の守護神として八幡信仰が広まっていった。

・越ヶ谷新町八幡神社には文和2年（1353）の青石（板碑）が納められており、そのころの創始と思われる。

・護郷神社（元浅間神社）の社殿は大正2年、地内の神社10社を併合した際、八幡神社の本殿、拝殿を移築したものである。

6 「浅間神社」

古来、富士山はその山容から聖なる山とされ、崇められてきたが、大噴火もたびたび起り、それを鎮めるために火山の神浅間大神を祀ったのが浅間神社である。浅間は「アサマ」とも読み、長野・群馬県境の浅間山のように火山を表しているといわれる。

浅間神社の本社は富士宮市にある富士山本宮浅間大社で富士山頂に奥宮がある。富士山を信仰の対象とする神社であるが、祭神は記紀神話の女神、木花之開耶姫である。木花之開耶姫は山の神大山祇神の娘で皇祖天照大神の孫瓊瓊杵尊の妻となり、火中の産屋で皇統につながる三人の御子を出産した。この話から火山の守り神とされ、容姿の美しさと相まって富士山の神（浅間大神）とされた。

富士登山は室町時代から始まったとされるが、江戸時代後期になると江戸庶民の間で富士詣が盛んになり、

富士山を模した富士塚が神社境内に多く作られ富士詣の代わりにされた。

・平方浅間神社、中町浅間神社、大竹浅間神社はいずれも築山の上に建ち、増林の護郷神社は大正2年の神社併合で改名したが、元は浅間神社で築山の上に建っている。築山は富士山をイメージしたものと思われる。

・中町浅間神社には富士山と大日如来を打ち出した「懸仏」が伝わる。大日如来は浅間神の本地仏で神仏習合がみられる。また、鳥居に「不二仙元」の額があり江戸時代、長谷川角行が開祖の富士講の影響がみられる。御神木のケヤキは市指定文化財である。

7 「水神社」

水神は文字通り水の神で雨乞い・水難防止・灌漑・火災防止などで祀られてきた。川が多い越谷では水難防止の神として祀られ、川沿いに水神社、水神碑がみられる。

・東町水神社はかつて、古利根川と元荒川の合流点に位置し、水難を鎮めるために祀られてきた。現在は河川改修により東町2丁目に移転している。旧南百村の鎮守で古くから「蛇纏り」「百万遍」の行事がある。増森神社は当初、水神社であった。古利根川が曲流していたころ「せいが淵」と呼ばれる難所があり、しばしば水難事故が起きた。そこで川の怒りを鎮めるために水神が祀られた。明治45年、村内の神社を併合、村名をとって増森神社と改称した。

8 「神明神社」

神明神社は皇室の祖神天照大神を祀る神社で、総本社は伊勢の神宮（内宮）である。記紀神話では天照大神は高天原の最高神で太陽神とされ、オオヒルメノムチとも呼ばれる女神である。

・本町市神明社は慶長年間に越ヶ谷宿が形成される過程で毎月 二と七の日に市が設けられ、この市の神として創建された。

当初は元荒川堤防上にあつたが、平成8年車道拡張工事のため現在地に移転した。

・東小林神明神社は江戸期には村の鎮守であったが、明治4年、北側にある香取神社が村社になったため当社は無格社となった。現在、香取神社の境外末社のようになっている。

・神明町神明社境内に平成11年付けの移転記念碑がある。かつて旧神明下村の名の起りとなった神明神社が神明橋近くにあった。

9 「日枝神社」

比叡山の地主神大山咋神を祀る神社で滋賀県大津市の日吉大社が総本社である。日吉（ヒヨシ）はヒエ（日枝）とも読み日枝神社と同じである。延暦2年（788）、最澄が創建した比叡山延暦寺（天台宗）の守護神となり各地に勧請された。天台宗との神仏習合で祭神は山王権現とも呼ばれ、山王社と称する神社も多かった。

・四条日枝神社は当初「山王社」と称したが、明治初年の神仏分離令により「日枝大神社」と改め、村社となった。明治41年、村内の神社を併合し、天神社の社地に移転した。そのため、「天満天神社」とも呼ばれる。その後、「日枝神社」と改め、河川の改修、橋の建設により、現在地の東町に移転した。

10 「第六天社」

第六天（大六天）は人間界で仏道を妨げる魔王とされたが、天上界では欲界第六天の他化自在天とされ、強い法力を持つと信じられた。

神仏習合の神で江戸時代に修験者を通じて広まったが、明治初年の神仏分離令で祭神・社名が変更されたりして無くなっていた。

・見田方大六天宮には寛永20年（1643）建立の日待講の宝キョウ印塔と改刻塞神塔がある。改刻塞神塔は明治初年の神仏分離時に仏教系の庚申塔を改刻したものである。

11 「女体神社・女帝神社」

女体神社と女帝神社は記紀神話の女神、伊邪那美命を祀る神社である。伊邪那美命は伊邪那岐命の妻で日本の国土と神々を生んだ。

・麦塚女体神社は村の鎮守で筑波山神社の筑波女大神（伊邪那美命）が草加の東漸院の女体神社に勧請された後、分霊された。

・平方女帝神社は伊邪那美命とともに仲哀天皇の皇后で応神天皇の母とされている神功皇后を祀る。

12 「八坂神社」

八坂神社は京都の八坂神社が総本社であるが、もとは祇園社といいインドの祇園精舎の守護神である仏教系の牛頭天王を祀っていた。明治初年の神仏分離令により八坂神社と改称し、牛頭天王と同一視される素戔嗚尊を祭神とした。牛頭天王は疫病・災難除けの神とされ、7月に行われる京都の祇園祭(祇園御霊会)は厄払いの祭りとして始まった。

・越谷には見田方の一社のみだが、大沢香取神社などに境内社とし八坂神社が祀られている。

13 「弁天社」

弁天は弁才天(弁財天)の略で、もとは仏教とともに伝来したインドの河神で音楽・弁才・福德の神である。また、室町時代に始まる七福神信仰の中の唯一の女神である。

・越谷には延宝3年(1676)創立の瓦曾根弁天社ほか見田方八坂神社裏手の「オイテケ堀」の伝説のある沼跡に内池弁財天、麦塚女体神社境内の池に弁天社が祀られている。

14 「愛宕神社」

京都の愛宕神社が本社で静岡の秋葉神社とともに記紀神話にある火の神、迦具土神を祀り火伏の神社として知られる。もとは愛宕山、秋葉山の地方神であったが、平安時代ごろから修験者の霊場となり、全国に広まった。

・越谷では蒲生の一里塚近くに一社あるのみで、境内社として鷲後香取神社などに秋葉神社は見かけるが愛宕神社はない。

15 「石神井神社」

西新井石神井神社は天正17年(1589)岩槻城が落城、城主太田氏の重臣高槻次郎佐衛門ほか諸臣がこの地に土着し、江戸豊島家の氏神であった石神井神社を分祀したものである。石神井神社は石剣(石神)を御神体とし石神井(東京都練馬区)の地名の由来となった神社である。主祭神は記紀神話の少彦名命で大國主神の国土作りに協力した神とされているが、当社の祭神は記紀神話伝説上の英雄で景行天皇の皇子、日本武尊になっている。

16 「大沼大明神社」

七左衛門大沼大明神社には創立に関わる戦国時代の伝説が二つあり、一は川口戸塚の城主が落武者としてこの地で没し、里人が武主大明神として祀ったこと、二は築城資材運搬の舟が大沼に沈み里人が兵神社を勧請したことである。

その後、この地を開発した会田七左衛門が再興し、新田地区の鎮守とした。

出典

「越谷の神社」久伊豆神社奉仕会 平成14年発行

「越谷ふるさと散歩・上」越谷市役所市史編さん室 昭和50年発行

「越谷ふるさと散歩・下」越谷市役所市史編さん室 昭和55年発行

「ふるさと蒲生の歴史ものがたり・上」

越谷市蒲生地区コミュニティ推進協議会 平成10年発行

「川のあるまち・11号」37号」加藤幸一氏の石仏石塔等紹介レポート

越谷市教育委員会 平成5年〜31年発行

「古志賀谷・15号」17号」越谷市郷土研究会 平成21年〜26年発行

「知っておきたい日本の神様」武光 誠

(株)角川学芸出版 平成20年発行

「神社に秘められた日本史の謎」新谷 尚紀

(株)洋泉社 2016年発行

「日本の神々と神社」三橋 健

(株)西東社 2019年発行